

中東再編計画：「新中東」のためのプロジェクト

グローバル リサーチ、2006年11月18日

Mahdi Darius Nazemroaya

「覇権は人類と同じくらい古い」 — ズビグニュー・ブレジンスキー元米国安全保障局顧問

「新しい中東」という言葉は、「大中東」に代わって、2006年テルアビブにおいてライス米国国務長官（西洋メディアはこの造語を創り出した人物として考えている）が紹介した。

東地中海のバクー・トビリシ・ジェイハン（BTC）石油パイプラインターミナルの落成式と時を同じくしてこの外交用語が使用し始められた。その後、英米の支援するイスラエルのレバノン包囲攻撃の絶頂期に米国務長官とイスラエル首相によってこの用語と概念によって広められた。両者は、「新中東」プロジェクトはレバノンから開始されることになると世界メディアに報告した。

この発表は、中東における英米イスラエルの「軍事的ロードマップ」を確認するものであった。ここ数年計画段階であるこのプロジェクトは、レバノン、パレスチナ、シリアからイラク、ペルシャ湾、イラン、NATO駐留のアフガニスタンの国境にかけて不安定、混乱、暴力の弧を創り出すことがその本質である。

米国とイスラエルは、レバノンが、中東全体を再編成し、「建設的混乱」エネルギーを解き放つためのツボとなることを期待して、「新中東」プロジェクトを公表した。米英イスラエルは自分達の地理的戦略のニーズと目的に応じて中東地図を画き直すことができるようにこの「建設的混乱」一地域一体に暴力と戦争状態を生成する一を次々に利用するであろう。

新中東マップ

ライス長官は、「ここで目撃しているもの（レバノンの破壊とイスラエルのレバノン攻撃に関して）はある意味、「新中東」の「産みの苦しみ」であり、米国がやることはすべからず、新中東に前進し、過去に戻ることは決してない」と記者会見で述べた。イスラエル空軍による無差別爆撃を受けていたレバノン国民の苦しみに対する無関心なこの言明のために、ライス長官はレバノン国内でも国際的にも批難された。

中東および中央アジアにおける英米軍のロードマップ

「新中東」に関するライス国務長官のスピーチはすでに舞台を設定していた。イスラエルのレバノン攻撃—米英は完全に是認していた—は、さらに歩み寄り、米英イスラエルの地理的戦略目標の存在の正当性を実証した。マーク・レヴィン教授によると、「新自由主義グローバリスト、ネオコン、最終的にはブッシュ政権は、彼らの望む新世界秩序を創造するプロセスを描く方法として創造的破壊に執着し」、かつ「米国の創造的破壊は、ネオコン哲学者でありブッシュ大統領顧問マイケル・レディーンという言葉によると、・・・創造的破壊にとっては“素晴らしい改革力”である」。

英米占領下のイラク、特にイラクのクルディスタンは、中東のバルカン化（分割）とフィンランド化（講和）のための準備地であるように思える。イラク議会およびイラク連邦化の名の下に、三分割化のための法的枠組みは、既に作成されている。（下の地図参照）

さらに、英米軍ロードマップは、中東を経由して中央アジアへの参入を争っているように見える。中東、アフガニスタン、パキスタンは、旧ソ連と中央アジアの旧ソ連共和国に英国の影響を拡大させるための踏み石である。中東は、ある意味で中央アジアの南の階段である。同様に、中央アジアは「ロシアの南階段」あるいはロシアの「旧ソ連邦諸国」と呼ばれている。

多くのロシア・中央アジアの学者、軍事計画立案者、戦略家、安全保障顧問、経済学者および政治家は、中央アジア（「ロシアの南階段」）はロシア連邦の脆弱な「柔らかい下腹部」と考えている。

ズビグニュー・ブレジンスキー元米国安全保障局顧問は彼の本「グランドチェス盤：アメリカの優位性とその地理的戦略要請」で、現在の中東はユーラシアのバルカン諸国と彼が呼んでいる地域のコントロールレバーであると示唆したことは留意すべきことである。ユーラシアのバルカン諸国とは、コーカサス（グルジア、アゼルバイジャン共和国およびアルメニア）中央アジア（カザフスタン、ウズベキスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、アフガニスタン）ならびにイランおよびトルコの一部から構成されている。イランおよびトルコは共に、ヨーロッパと旧ソ連に割り込む中東（コーカサスを除く）の最北端階段を形成している。

「新中東」地図

中東、NATO駐留アフガニスタンおよびパキスタンの比較的知られていない地図が、2006年半ば以降、戦略、政府、NATO、政策ならびに軍事関係筋で出回っている。この原因としては、コンセンサスを形成し、おそらく中東で起こるであろう激動の変化に対してゆっくりと一般大衆に備えさせることを目的として公表することが許可されたからであろう。これは、「新中東」とみなされる再編・再構築された中東の地図である。

（地図）

.....

注：下記の地図はラルフ・ピーターズ中佐が作成した。2006年6月に軍ジャーナルで発表。ピーターズ氏は全米軍事アカデミーの退役中佐。（地図版権：ラルフ・ピーターズ中佐 2006年）

地図は公式に国防省の方策を反映していないが、軍高官を対象にしたNATO防衛大学の訓練プログラムで使用されてきた。

この地図は、他の類似の地図同様、軍事計画筋でも全米軍事アカデミーでも使用されてきた。

.....

この地図は、米国のウッドロー・ウィルソン大統領と第一次世界大戦の時代に遡る中東の潜在的国境の古い地図を含む他のいくつかの地図に基づいているように見える。地図に含まれている再設計された国境が基本的には現代の中東の諸問題を解決してくれると信じる（米国陸軍）退役中佐ラルフ・ピーターズの発案物として紹介・提示されている。

「新中東地図」は、2006年7月10日に一般発売された同中佐の本「Never Quit the Fight」の目玉で

ある。再編された中東のこの地図は、ラルフ・ピーターズの解説付で米軍の軍ジャーナルに「**Bloody Borders: How a better Middle East would look**」のタイトルでも発表された。

ピーターズ中佐が最後に配属されていたのは米国国防総省内の陸軍参謀本部情報部長室であり、軍事ジャーナル誌のための戦略および米国の外交政策に関する多数のエッセーを書いたペンタゴンの一番の権威者の一人であるということは注目すべきことである。

ラルフ・ピーターズの「戦略に関する以前の4冊の本は、政府と軍に非常に影響を及ぼしている」ことが書かれているが、はたして全く反対のことが起こっているのではないかと尋ねても許されるかもしれない。ピーターズ中佐は、米国政府とその戦略立案者が中東に予測していたものを明らかにし、提示しているのだろうか。

再編された中東という概念は、中東ならびにその周辺地域の人々のためになる「人道的」かつ「正しい」措置であると提示されてきた。ラルフ・ピーターズによると：

国境が完全に正しいということは決してない。しかし国境で強制的に結び付けられるか引き離される人々が蒙る不正の程度には大きな差、特に自由と抑圧、寛容と残虐行為、法の支配とテロリズムあるいは戦争と平和に大きな差をもたらす。

世界で最も恣意的で歪んだ国境は、アフリカと中東にある。（自分たちの国境を定義するのに散々苦労してきた）利己的なヨーロッパ人によってひかれたアフリカの国境は、何百万人の地元住人の死を誘発し続けている。しかし、チャーチルの言葉を借りれば、中東の不公平な国境は、地域で収拾できる以上の多くのトラブルを生成している。

中東は、機能不全に陥っている国境だけよりもはるかに多くの問題—恥ずべき不平等による文化的停滞から破壊的宗教過激主義にいたるまで—を抱えている一方で、地域の広範囲にわたる失敗を理解しようと努力する上でのタブーは、イスラム教ではなく、我々の外交官が崇拝しているすぎましいが極めて神聖な国境なのである。

勿論、どんなに厳格に国境を調整したとしても中東の少数派を幸せにすることはできないであろう。時には、民族・宗教グループが入り混じって生活したり、相互結婚している。他の場所では、血や宗教に基づく再会が現在の支持者達が期待するほど楽しいものではないことが証明されるかもしれない。この記事に付属する地図に投影されている国境は、クルド人、バルチー族、アラブシーア派のような最も重要な「だまされてきた」集団グループがうけた不正を正すが、中東クリスチャン、バハイ派、イスマール派、ナクシュバンディ派およびその他多くの少数派については依然として十分に把握していない。領土という報酬をもってしてもひとつの決して忘れられない不正行為—瀕死のオスマン帝国によるアルメニア人に対する大虐殺—を正すことは決してできない。

しかも、ここで再考された国境の不正を放置したままにも拘らず、そのような大幅な国境改正をすることなしに、より平和な中東をみることは決してできない。

国境を変更するという話題を嫌悪する人々でさえ、まだ不完全であってもより公正な、ボスポラス海峡とイ

ンダス河の間の国境の改正を思いつくという課題に従事することには役立つであろう。しかし、欠陥のある国境を再調整するために戦争以外の有効な手段を国際的政治手腕でもこれまで開発したことがないことを受け入れ、中東の「有機的」国境を把握する知的努力をすれば、我々が現在どれくらいの困難に直面しているのか、また将来どれくらいの困難に直面することになるかが理解できる。我々は、正されるまで憎悪と暴力を生成し続ける、巨大な、人為的奇形に取り組んでいるのである。

「必要な痛み」

中東においては「文化的停滞」があることを信じる以外に、ラルフ・ピーターズは、彼の提案は本質的に「厳格」であることを認めているが、それは中東の人々には必要な痛みであると主張していることは留意すべきである。この必要な痛みと痛みという見解は、イスラエル軍によるレバノンの荒廃は、米国、英国、イスラエルが思い描く「新世界秩序」を創り出すためには必要な「産みの痛み」であったとするライス国務長官の信念と驚くほど似ている。

さらに、アルメニア人虐殺というテーマは、トルコ人を怒らせるためにヨーロッパで政治問題化され刺激されていることは注目に値する。

中東の民族国家の見直し、解体、再構築は、中東における対立を解決するものであると一括して考えられてきたが、これは全くの誤解を招くものであり、事実と反し、作り話である。「新中東」とその地域の再編国境の支持者達は、現代の中東問題と紛争の根源をありのまま描くことを避け、また描けないでいる。中東に影響を与えているすべての主要な紛争は、英米イスラエルのアジェンダが重なり合っている結果であるという事実をメディアは認めていない。

現在の中東に影響を与えている問題の多くは、以前から存在していた地域の緊張を故意に悪化させた結果である。宗派間分裂、民族間の緊張および内部武力闘争は、アフリカ、ラテンアメリカ、バルカン諸国および中東を含む地球上の多くの場所で、米英が伝統的に利用してきた。イラクは、米英の「分割統治」戦略の多くの例の一例にすぎない。他の例としては、ルワンダ、ユーゴスラビア、コーカサス、アフガニスタンがある。

現在の中東の諸問題の一つは、米英両国の外交政策が実際意図的に妨害してきたために、真の民主主義がないことである。西洋式「民主主義」は、米国の政治要求に従わない中東諸国にとってのみ欠かせないものであった。必ず、対立があるのは民主主義がないからだという口実となっている。サウジアラビア、エジプト、ヨルダン、英米軌道領域内でしっかりと連合しているので、米国にとっては問題のない非民主国家の例である。

さらに、米国は1953年のイラン（モサデグ内閣総理大臣の民主的政府に対して米英が援助するクーデターがあった）から、英米同盟が軍事支配、専制主義者および独裁者をなんらかの形で支援する、サウジアラビア、エジプト、トルコ、アラブ首長国およびヨルダンまで中東の真の平和主義運動を意図的に妨害・強制排除してきた。この最新の例がパレスチナである。

ローマのNATO軍事大学でのトルコの抗議

ラルフ・ピーターズ中佐の「新中東」地図はトルコにおいて怒りの反応を引き起こした。2006年9月15日のトルコの新聞発表によると、「新中東」地図はイタリアのローマのNATO軍事大学で展示された。また、分割されたトルコが提示されるとすぐさまトルコの将校が激怒したと報告された。地図は、ローマでNATO役員の前で発表される前に全米軍事アカデミーからなんらかの承認を得ていた。

トルコの幕僚長は、米国の統合参謀本部議長であるピーター・ペース将官に連絡を取り、行事と中東、アフガニスタンおよびパキスタンの再編地図の展示に抗議した。しかも、ペンタゴンはトルコに対して、地図はその地域における米国の政策・目標を反映したものではないとわざわざ断言したが、これは、中東およびNATO駐留アフガニスタンにおける英米の行動とは矛盾しているように思える。

ズビグニュー・ブレジンスキーの「ユーラシアバルカン諸国」と「新中東」プロジェクトは関連があるのか？

以下は、元米国国家安全保障局顧問ズビグニュー・ブレジンスキーの著書「グランド・チェス盤：アメリカの優位性とその地理的戦略要請」からの重要な抜粋である。ブレジンスキーは、「ユーラシアバルカン諸国」の中でも最も有力な国家であり、南階段に位置する、トルコとイランは潜在的に「内部民族紛争〔バルカン化〕には脆弱であり」、また「両国のどちらかまたは両方が不安定化すれば、地域の内務問題は手のうちようがないであろう」とも述べている。

分割、バルカン化されたイラクはこれを実現する最善の手段となるように思われる。米国政府自身が認めているものの中で我々が知っているものを解釈すると、中東の「創造的破壊と混乱」は中東を再編成し、「新世界秩序」を創り上げ、中東および中央アジアにおける米英のロードマップを拡大するには有益な資産であるという信念がある。

ヨーロッパでは、「バルカン諸国」という言葉は民族紛争と大国の地域対立のイメージを想起させる。ユーラシアにも「バルカン諸国」はあるが、ユーラシアバルカンはもっと面積が大きく、人口も多く、宗教的にも民族的にもより雑多である。それは、ヨーロッパ南東部、中央アジアならびに南アジア〔パキスタン、カシミール、西インド〕の一部、ペルシャ湾ならびに中東を含む、・・・・・・世界的に不安定な中心地帯の限界を示す大きな地理的長楕円形内に位置している。

ユーラシアバルカンは、その大きな長楕円形の内核を形成している（・・・・）そこは、ある特に重大な点で外核とは異なっていて、つまり力の真空状態となっている。ペルシャ湾および中東に位置する国家のほとんどもまた不安定であるが、アメリカの国力がその地域〔中東を意味する〕の最終調停者となっている。外部地帯の不安定な地域はこのように単一覇権地域で、その覇権によって鍛えられる。対照的に、ユーラシアバルカンは、実に南東ヨーロッパのより古い、より身近なバルカンを髣髴とさせる。政体が不安定であるばかりでなく、より強力な隣国の侵入を招いている。隣国各々が、その地域の他国支配に断固として戦う決意である。「ユーラシアバルカン」という呼称を正当化しているのは力の真空状態と力の吸引というこのおなじみの組み合わせである。

伝統的バルカン諸国は、ヨーロッパの覇権争いにおいては潜在的に地政学的懸賞に相当する。ユーラシアバルカンは、ユーラシアの最も豊かでかつ最も工業の発達した最西端と最東端をより直接的につなぐように作られた新しくならざるをえない交通網にまたがっているので、地政学的にも重要である。さらに、中

国もこの地域への政治的関心を示しているので、安全保障の観点から重要であり、また最も近く、より強力な隣国の少なくとも3国すなわちロシア、トルコ、イランへの歴史的野心の観点からも重要である。しかしユーラシアバルカンには潜在的な経済的懸賞としてずっと重要である。金を含む重要な鉱物に加えて、莫大な埋蔵量の天然ガスと石油がそこにあるからである。

世界のエネルギー消費は今後二、三十年にわたりかならず大幅に増加するはずである。米国のエネルギー省の推計では世界の需要は、1993年から2015年の間に50%以上増加し、最も著しい消費増加は極東で発生すると見込まれている。アジアの経済発展の勢いによって、新しいエネルギー源の調査・開発を求める圧力が既に生み出されている。また中央アジア地域およびカスピ海盆地には、クウェート、メキシコ湾あるいは北海の天然ガスおよび石油の埋蔵量を少なくみせる埋蔵量があることが知られている。

その天然資源へアクセスし、その潜在的な富を共有することは、国家的野心をかきたて、企業利益を促し、歴史的要求を再燃させ、帝国主義的願望を復活させ、国際的競争をあおる目標となる。その地域は力の真空状態であるばかりでなく、内部的に不安定であるために、なおさら危険な状況になる。

(.....)

ユーラシアバルカンとは、なんとか前述の説明にあう9カ国を含み、有力候補国としてもう2カ国がある。9カ国とは、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア—これらはすべて消滅したソ連の一部であった—そしてアフガニスタンである。

このリストに追加される可能性があるのは、トルコとイランである。両国とも政治的にも経済的にもより発展性があり、ユーラシアバルカン内の地域的影響力を求める積極的な競争相手であり、従ってこの地域における重要な地理学的戦略家である。同時に、両国とも内部民族紛争を起こしやすい可能性がある。いずれかあるいは両国ともが不安定になれば、この地域の内部問題は手が付けられなくなるであろう、またロシアによる地域支配を抑えようとする努力は無駄にさえなるかもしれない。

(強調は筆者による)

中東再編

中東は、ある意味、第一次世界大戦につながる何年かのバルカン諸国ならびに中東ヨーロッパに驚くほど似ている。第一次世界大戦のすぐ後に、バルカン諸国と中東ヨーロッパの国境線が引き直された。この地域は、外国の経済的利権と干渉の直接的結果である第一次世界大戦前後に動乱、暴力、紛争の時期を経験した。

第一次世界大戦の背後にある理由は、サラエボでのオーストリア・ハンガリー（ハプスブルグ）帝国の王位継承者フランツ・フェルディナンド大公の暗殺というありふれた教科書の説明よりも邪悪なものである。経済的要因が1914年の大規模な戦争の本当の動機であった。

元ウォール街銀行家でありまた米国非課税財団を調査した、米国議会捜査官であったノーマン・ドッドは、米国の財政、政策、政府を陰でコントロールしている有力者たちは実際に米国の戦争関与を計画したが、それによって彼らは権力掌握を確固たるものにしたいであろうと1982年のインタビューで確認した。

以下の証言は、ノーマン・ドッドのG. エドワード・グリフィンとのインタビューのコピーからのものである。

さあ1908年まで来た。1908年はカーネギー財団が事業を開始した年であった。そしてこの年、理事会が初めて具体的な問題を提起し、その年の収支を非常に学問的にすみからすみまで討議した。そしてその問題とはこれである。アメリカ人全体の生活を変えたいと仮定すれば、既知のもので戦争よりも効果的な手段はあるだろうか。そして彼らは、人類に知られているもので、その目的にかなう効果的な手段は戦争以外にはないと結論を下している。それから1909年、第二の問題を提起し、その問題すなわちどのようにして米国が戦争に関与するかを話し合っている。

さて、当時、戦争への関与以外にこの国（米国）の人々の思考から除去されたテーマはあったらどうか。バルカン諸国には断続的なショー（戦争）はあったが、多くの人がバルカン諸国がどこにあるかさえ知っていたかどうかはとても疑わしく思う。そして最終的に彼らは次のように答えている。我々は国務省を掌握しなければならない。

そしてそれから、極めて当然ながらどのようにして掌握するかという問題が提起された。かれらは、この国の外交機構を乗っ取り、掌握しなければならぬと答え、それを目指して進もうと決意する。それから時間が経過し、ついに戦争となり、第一次世界大戦となったのであろう。当時、覚書に、ウィルソン大統領に戦争が余り早く終わらないことを確認するよう警告する電報を打つという驚くべき報告を記録している。そして最終的には勿論戦争は終わる。

当時、彼らの興味は、第一次世界大戦が勃発した1914年以前の生活へ米国の生活を逆戻りさせると呼んでいるものを阻むことに移っている。

（強調は著者による）

レバノンおよびシリアの東地中海海岸からアナトリア（小アジア）、アラビア、ペルシャ湾およびイラン高原までの中東の再編と分割は、英米イスラエルの積年のアジェンダの一部である、広範な経済的、戦略的、軍事的目標に応えるものである。

中東は、正しい引き金、おそらくは英米およびイスラエルの両方またはその一方がイラクおよびシリアに対して空爆を開始すればすぐに爆発する火薬庫になるよう外部勢力によって条件付けられてきた。中東でより大きな戦争が起これば、英米の利権とイスラエルにとって戦略的に有利な国境線が引き直されることになる可能性がある。

NATO駐留アフタニスタンは名前以外はうまく分割された。パレスチニア内戦が育成されて、レバノンの分割が扇動されているレバントでは憎悪が受精されている。東地中海はNATOが軍隊配置に成功している。シリア、イランは、軍事アジェンダを正当化する目的で、西洋メディアは、シリアおよびイランを悪者扱いし続けている。そして、西洋メディアは、イラン人は共存できないとか紛争は占領ではなく、シーア派、スンニ派、クルド人の国内闘争とみなされる「内戦」であるという事実に対し、かつ偏った概念を毎日供給してきている。

中東の異なる民族文化および宗教グループ間に意図的に憎悪を作り上げようとする試みは組織的なものである。事実、それは綿密に計画された秘密情報アジェンダの一部である。

さらに不気味でさえあるが、多くの中東政府は、中東の人々の分裂を煽動する米国の手助けをしている。最終目標は、より広大な地域における英米イスラエルの利益にかなう「分割統治戦略」によって、外国による占領に対する抵抗運動を弱体化することである。